に、外交官の令夫人を以て、自から任じて居るといふ騷ぎ。

氣障雄どん、幾とせかけて、孃樣に懸想はして居たものゝ。さて先方は何しろ主家の一人娘。夫に學識の上から申せば、實に孃樣の足許にすら及ばぬ始末。勿論夫れとは無しに、意中をほのめかした事も無いではあらぬが、まさかに打ち開ける譯にも往かず。鳴くに音の無き哀れな螢、たゞ草葉がくれに、思ひに燃えてのみ居たのである。大に苦心した揚句、今宵藏開きの祝宴に乘じ、一場の演說を試み、以て自から、自己の、斯くの如き學識あり、雄辯ありと、意中の人に知らしめ、一思ひ、心の中を殘らず語らはん計書であつたのだ。

今しも無事に、譯の分らぬ寐言を了えるや、氣障雄どん、そつと席を退き。四邊の騷擾を氣にも止めず、高蹈逸出讀書三昧に在る孃樣の机の邊に、坐し、

『お孃さん、なぜあなたは、私の意中を御察し下さらぬのです……』

斯ふ單刀直入に切り込む。孃樣平然として、氣障雄どんを睥睨し

『お前は、私を何と思てるの。失敬な事を言ふと、阿父樣に申上けるよ。』

幾らハイカラは、顏の皮が厚く、情が冷却して居るとは言へ、主家の娘に、斯ふ咎められては、誰とて二の句は繼ぎ得まい。

氣障たつぷりな、商店ハイカラのモデル男、氣障雄どんのアウトラインは、以上說くところで十分であらう。要するに商店のハイカラは、他のハイカラに比し、顏の皮極めて厚く、其代り腸は殆ど空。從て冷血無淚、我利一徹、人情も無ければ義理も知らず。先づ人間としては、眞に不完全極まる、最下等の人種に屬して居る。

『田舍のハイカラ』

ハイカラと言へば、誰しも同じく嫌な心地するが常であるやうだが、田舍のハイカラと來ては、甚だ趣味に富んで居る、試に諸君、正月の休暇時、若くはお盆の仕事休みに、都塵を去る一里、東京で言へば、大森の近在とか、王子田端の附近にでも往きて見給へ。一種異樣な風采せる村の若い衆連に逢ひ、眞に失笑の禁じ得ざるものがあるだらう。

殊に諸君をして、奇異の思、否滑稽に感せしむるは、是等若衆連の身邊に幾多女性的物品の附着せる一事である。尤も都のハイカラでも下等のハイカラになると、稍々もすれば、女性的物品を身に附け、却りて之を誇りとなす如き傾向を認むるけれど、田舍のハイカラに於ては、殊に甚だしいのだ。一體、都でも下等のハイカラは然る如く、田舍のハイカラは、如何なる思想を有するが故に、爾く女性的物品、例之ば、女持の白羽のショールとか、女持の財布とか謂つたやうな品物を所持し、以て之を無上の裝飾であり、且つ光榮を加ふるものと思惟して居るのであらふ——

——之は一寸面白い研究のサブゼクト(題目)である。

僕大に考究した結果、左の如き説明を與へ得るに達した。

そも〳〵吾人のハイカラ主義を奉じ、ハイカラ風を吹かせる唯一の目的は、何處の大哲學者が、何と仰せられても、之は實に即ち『婦人の愛を得んが爲め』で。若し現代より婦人を去るか、さも無くんば、婦人をして悉く、男子の愛の對象たるべき、總ての物を失はしむれば。たとへ一方、ハイカラの隆盛に努力するも、眞に朞月の間を出でずして、ハイカラの自滅するは、察するに餘りある事理だ、

斯くの如く、ハイカラの生じたる所以は、一に全く『婦人の愛を得ん』てふ動機で。　人若しハイカラの頭から足に至るまで、はた其の言ふところ、行ふところ、悉く婦人の愛を挑發せしむべき、何ものかを有せることが分明し、從て僕の所說の、眞に然るを是認せざるを得まい。　既に然りとすれば、田舍のハイカラ、幷に都でも、下等の部に屬せるハイカラが、一向に女性的物品を身に着くるは、皆な之れ、婦人の愛を挑發せしめんためであることが、察し得らるゝであらふ。

要するに彼等は、思想淺薄にして、婦人の愛を得るには、婦人の好きそうな物品を身に附くるに在りと信じ。　毫も『男らしいハイカラ』とか、『舶來のハイカラ』とか、謂つたやうな點には想到せぬのである。

併しどつちかと言へば、田舍のハイカラ、幷に都でも下等のハイカラは、無邪氣なもの。　若し『天眞爛漫』てふ文字が斯る場合にも應用し得るとすれば、彼等や、實にハイカラ中に於ける、天眞爛漫なものと言て差支はあるまい。

去りながら僕等はじめ、是等女性的物品を身に附け、以て得意がれるハイカラを目擊しては、心自から

『馬鹿氣とるな』

と、半ば嘲笑的に、そが思想の幼稚淺薄なるを悲しまざるを得ぬ――――妙ちきりんな、黒ずんだ筋ばつた手に、眞紅(しんく)の風呂敷携へ、十七八の娘盛りが着そうな、思ひ切つて大柄な米澤なぞの、書生羽織を身に着け、帽子を被らず雪白の足袋…………どう見てもちとキ印。　滑稽と言へば滑稽ぢやが、之を誇りとせる心中は、甚だ氣の毒なものである。

併し田舍のハイカラは、あんまり、首の廻らぬ苦勞はせぬのだ。　此の點よりすれば、或はハイカラ中の智なるものかも知れぬ。

『女湯のハイカラ』

勿論ハイカラは、男子の獨占すべきものでは無い。以上、大ざつぱな部分的研究ではあるが、苟くも各種の男性ハイカラに就き、説明するところありたるからには、また女性ハイカラに就きても、記する無きを得まい。併しハイカラ女學生ぢやとか、ハイカラ奥様ぢやとか、さては、ハイカラ藝者などは、事餘りに陳腐に屬して居る。されば側面觀察者は『女湯のハイカラ』に就き、少しく説くところあり、以て女性ハイカラの、アウトラインを與ふる積りである。

新聞記者――と言へば聞えがよいけれど、新聞記者は悉く『無冠の宰相』ばかりでは無い。中には箸にも棒にもかゝらぬ、眞に厄介千萬な有害無益の無賴漢も御坐る。此に謂ふ新聞記者は、敢て厄介千萬な無賴漢と申す程では無いが、御職業柄だけあつて、家賃を踏み倒す位は、お茶漬さら〳〵と謂つたやうな剛の者。酒屋の小僧の言ふところに依れば、當番地に移轉して以來、米屋にも、魚屋にも、酒屋にも、一錢の支拂せず。若し強てと責むれば、二言目には必らず

『取れる者なら取れ、紳士に向て失敬を謂ふな』

と威嚇され。何とも手の附けやう無い、超俗的紳士であるそうな。

似た者夫婦とは、よく言つたもの。其の妻君、またなか〳〵の剛の者。湯屋切てのハイカラ奥さん。『七つ道具』と申せば、知らぬ者ない名物と成て居る。而して其の『七つ道具』など謂ふ、異名を附せられたのは、實に湯屋に御持參遊ばさるゝ道具が、シヤボン、アカスリ、ホウズミ、オシロイ、ヌカブクロ、ベニ、二八スヰ、都合七種。此の七種の道具を、小籠に入れ『天下の美人は、妾になん侍る』とでも言つたやうな顏付。夫れが爲めで光

榮か、耻辱か、兎に角斯る異名を得たのである。

高慢は婦人の禁物など、天保道德を擔（かつ）がずとも、此の自稱美人を見る者、只單に見たばかりで、早くも

『いけすか無い女だな』

と吐氣を催さぬは無いであらふ。若し親しく面談でもしやうものなら、半時間とたゝぬ中

『世の中に、女程いやなものは無い』

と眞にぐんざりせざらんとするも、能はぬに定まつて居る。

自稱美人、持參の道具で名高いのみならず、また長湯を以て、名稱近隣に喧しいのだ。番臺婦人が曾て

『あの奥さんと來ては、ほんとに、湯錢を三人分頂かなければ合いませんよ』

と言つたのは、洵に適當の言である。勿論『ながし』は取るが、併し大桶を二十杯も三十杯も使はれては、一錢の流賃（ながし）ではやりきれたものでは無い。商賣が商賣とて、滿更

『あなたのやうな長湯の方は、御斷り致します』

とも斷はられず。心中の苦痛、さこそと察せられる。

尤も長湯の原因が、身體を洗ふためでゝもあらば、大に恕する點もあるが。實のところ、當り放題、誰れ彼れの差別無しに

『近頃の政界は、大そう混亂の樣子ですネ』

と、妾こそは、無冠の宰相の良妻。時到れば、交際社會の華（はな）と、謳（うた）はるゝ身分ですと謂はぬばかり。さては

『なんて此頃は、趣味の高尙な小說が出んのでせう。そうすると、紳士國たる英國の文界は、眞に隆（さか）んなものですネ』

斯んな氣焔が出る。洵に御言葉だけは立派だが、第一英語が讀めるのか、其點が甚だ心細い。一體御宅には原書と言へば、たゞの一冊も御座らぬでは候はずや――之は失禮な申事。自稱美人、七つ道具女史にして、若し高等女學校に、一年なり、二年なり席を置かれたものとすれば、ナショナル讀本の一の初め位は、どうにか讀めぬ筈は無からう。然らば即ち、たとへ一冊の原書なくとも、全然英語を讀めぬとは申されぬ道理。實に五十歩百歩の別はあれ、甲を棄て、兵を曳て走るは、矢張り敗走の弱卒。夫れと同じ理由で、リーダーの一が、どうにか讀めるのも、セークスピーアがすら／＼解するも、共に英語が讀める人。程度を無視すれば、兩者、毫も差別は無いのだ。去りながら『英國の文界は、隆んなものですネ』とは、何だか天井の鼠が笑つて居そう。

若し夫れ、女學生をでも捕へやうものなら、先づ學校は何れかと問を發

し。やがて口頭を怒らし

『死せる學校教育は、社會に活用致しません。ちいさい宅に御越し遊ばせな、實用を主とせる、歐米の女子教育談でも申し上げますから』

斯る氣焔も出るのだ。素より人は、見かけに依らぬ者とは、誰しも口癖のやうに言ふ言葉であるが。さりとて『七つ道具』に、歐米の女子教育が話し得るとは、如何なる近視眼者流か、想察することが出來るだらう。捕へられた女學生や、必らず腹の中で

『此の方、狂人で無いか知らん。氣味の惡い人よ』

と危ぶんで居るだらう。

之は『七つ道具』の異名を以て、町内町外に聞え渡つた自稱美人、即ち女湯のハイカラの實談である。要するに女子は、どんな賢婦貞女でも、男子

に比すれば、百倍も虚榮の念强く。而してそが强盛なる虚榮心は、柄にも無く

『私、電車大嫌ひよ。ゴム輪の二人引なら、どうにか我慢出來ますけれど、矢張り、自動車に限りますわネ』

なんかと、飛んだ夢を見たり。年から年中、債鬼に追ひ廻されて居ながら

『近頃のやうでは、銀行も險呑です。と言て郵便局は役所くさくて嫌いですし。さればと申て、何十萬の金を、金庫に仕舞ひ込んで置くのも心配。あなた何か御名案はありませんか』

斯んな寐言も言つて見るのだ。夫れ程御心配なら巣鴨の病院へでも、御越し遊ばしでは如何………

亭主として、ハイカラが禁物なら、主婦として、またハイカラは大の禁物であらう。併し蓼喰ふ蟲も好々、殊に好んで、ハイカラを妻にしやうと、粉骨碎身の勞を敢てしとる馬鹿者もあるのだ。馬鹿に附る藥が無いとは、古人甘いこと言つたもの。

『ハイカラの變形』

二本しか無い筈の鳥類に、三本脚が出來たり。二本あるべき筈の牛の角が、一本しか無かつたり。實に自然界には、隨分と變形の產物が多いのである。惟ふにハイカラなぞも、人類界に於ける、一種の變形的產物かも知れぬ。

僕が此に所謂ハイカラの變形とは、實にかの禪坊主臭つた、蓬髮垢衣の士を意味して居るのだ。勿論文字の上よりすれば、ハイカラの語や、蓬髮垢衣の士に對しては、根本的矛盾の思ひがある。併し字義を離れ、眞

意に據りて之を見れば、雪白のカラーに眞紅のネクタイ、之を以て當世流行の才子で候の氣取り方も。はた蓬髪垢衣、之を以て天下を丸呑にせる豪傑風も、其のハイカラ的氣障さ加減に於ては、差したる相違のあらふ筈は無い。識者はむしろ却りて、後者を嫌惡するの、前者に比し數倍の上にあるかも知れぬ、

一體人情の自然として、所謂ハイカラらしくハイがる者よりは、かの妙に澄して、紛々たる輕薄論ずるに足らんやなどと、禪味くさつた似而非ハイカラを、遙かに深く惡くむのである。されば こそ孔子聖人も

『似て非なる者を惡くむ。莠を惡くむは、其の苗を亂るを恐れてなり。佞を惡くむは、其の義を亂るを恐れてなり……』

と諄々說かれて居るのだ。然らば即ち變形のハイカラや、之を純粹なるハイカラに比し、遙かに大害あるものとして、極力之が全滅を唱導する、蓋し理の當然ではあるまいか。

而して變形のハイカラは、殊にお國者の中に於て、甚だ多いやうな心地がするのだ。現に筑前とか、長州とか謂つたやうな、何かにつけ似而非者の多いお國からは、隨分と變形のハイカラが出てござる。人若し是等諸國の、鄉友會へでも往かふものなら、變形のハイカラ先生の、いかに氣取り込んで、ありし昔の燕趙悲歌の士然たる。必らずや、見るからゾッとして、『巢鴨向きかな』と嘆息せざるを得ない。

併し、もと〳〵ハイカラ根性から出來た變形兒なので、矢張り吹けば飛ばんず灰殼一流。成る程人の前では、そが蓬髪垢衣に對し、甚だ釣合よく。やれ『人格の修養』ぢや、やれ『管鮑の交』ぢや、やれ『大丈夫意氣を尊ぶ』ぢやなんかと、なか〳〵振た言葉遣ひに、熟達しては居らるゝけれど。素性は何とも致し方無いもの。鍍金が剝げ易いと同理で、『戀』の前にでも

出やうものなら何のたわいも無く、早速ハイカラの眞相を表白し、蓬髮垢衣に似も寄らず『神聖の戀』はどうぢや『失戀の涙』はどうぢやと、盛に寐語ずり始むると來る。いやはや齒の根の浮く氣障さ加減。尤も之が、眞紅のネクタイであつて見れば、何如にも調和が出來て居るので、敢て見惡くゝも無いが。蓬髮垢衣で斯んな氣障をやられては。恰かも圓頂黑衣の僧侶が、醉に乘じて痴話を始むると好一對。甚だ氣のきかぬ風體である。

要するに變形は、其の何物たるに拘らず、不純不粹、心ある者は、之を惡くまぬは無いのだ。たとへハイカラは、純不純に關せず、總じて厭はしき文明の産物たるにせよ、吾人の常識は似而非ハイカラたる、此の變形兒に於て、殊に嫌惡の甚だしきものがある。

第七章　電車の側面觀

『社會の縮圖』

電車の側面觀なぞと言へば、思想單純なる連中は、大方、書家の材料にでも供するのであらふと、速斷せらるゝかも知れぬが。僕は素より、そんな淺薄疎鹵な考で、筆を執る次第では無い。尤も電車の側面觀を、文字通りに解すれば、如何にも、高く見たところで書家の材料、時に或は、工藝家の資料とも看取し得るけれど。僕の所謂電車の側面觀は、實に即ち電車の乘客に對し、側面觀察を投じた結果の發表に外ならぬのだ。

兎に角電車の中は、確かに社會の縮圖と見ることが出來る。人若し、現社會は、果して如何なる狀態に在るかを知らんとせば、往復の車賃三四回分はずいぶんで、東京市内をグル〱迴つたら。其日の夕景には、既に朧

氣ながら、現社會のアウトラインを悟了し得るに違い無からふ。併し改言するまでも無いが、たとへ社會の好縮圖たる、此の電車に乘るといへども、若し其人にして、人心の機微を洞察する底の、眼識無くては駄目な話。實に達人とは、八面玲瓏、紙背に徹する眼光を放ち、能く物外を達觀し得るの非常人である。たとへ達人ならずとも、凡俗の有せる俗眼を以てしては、電車の眞相を觀了し得るなどは、素より不可能事であらふ。現に電車の車掌殿、一年三百六十五日、雨にも、風にも、社會の好縮圖中に居りながら、猶ほ長へに吳下の舊阿蒙。年は人らしく一年づゝ加はるとも、智惠の方は一向に増さず、依然として車掌相當な、極めて珍糞漢なる生涯を送りつゝあるでは無いか。

之を要するに觀察力は、處世上頗る重要なる作用を致すもので。幸福も成功も觀察力に待つところ甚だ大なりと言はざるを得ぬ。而して

觀察力は、人に由りて其の類を異にして居る、詳言すれば即ち人に由りて、觀察の方法を異にするのだ。

試に之を説かんに――古今同光、萬里一色の月。おでん屋さんは、別段何の意義をも月に依りて得ぬけれど、騷人墨客や、此の月を見ると共に、眞に言ひ知らぬ美觀を得るのだ。

『江畔何人初見月
　江月何年初照人。』

と吟じた張若虚や、

『まことゝは誰か思はん一人見て
　後に今宵の月をかたらば。』

と吟じた僧西行や、

『夜の女王(きみ)

海を總て、陸を半ば、
治めたまふ夜の女王(きみ)。
思に惱める人を下瞰(えおろ)し
眞夜中の高潮を馳りて
寐殿に休むべく
西へ西へと下り玉ふ。』

と歌つたバットラーや、實に彼等は月に對し、常人の企及し得べからざる、非凡なる觀察力を實現したのであつた。

其は皎々たる空中の孤月輪、此は譊々たる車中の凡庸者、素より比較にはならぬけれど。　皎々たる明月の、觀察力乏しき者にありて、殆ど無用の長物なると等しく、譊々たる俗物、また觀察力乏しき者に取りては、社會の好縮圖どころか、何の意味も無き譊々者たるに止まるは、察するに餘りありと謂ふ可しだ。

そも〳〵成功の要素は、決して一二の少數に止まらず。　且つ人其人の地位、境遇等にも關するが故に、詳細に列擧すれば、實に幾十百千の多數にも達するであらふが。『鐵的意志』と言ひ『天火の如き道念』と言ひ、或は『慈雨の如き同情』と言ふ類は、古今東西、眞正なる成功者の、齊しく有せるところのものである。　去りながら今若し、成功の要素を語るに際し、一個『觀察力』を言ひ落すあらば、僕等は、たとへ如何なる名論卓說でも、最も容易に、不完全なるものとして貶するのだ。　實にスペンサーの

『完全なる觀察は、あらゆる偉業の要素を成す。』

と斷言したるは、僕等も亦た言はんと欲するところである。

既に、上述せるが如く、電車は確かに活社會の好縮圖である。　人若し、達人の夫れならずとも、普通の觀察力を有し、車中、常に乘客に就て精觀細

察せば、活社會の眞相や、幾分なり捕ゆることが出來、從て處世の呼吸にも通ずべく、また從て成功の端緒をも見出し。高名富貴、之を得る敢て難しとせず位な、壯語も口にし得るであらふ。

『樂天的生活の秘訣』

人に依りて觀察の方法を異にすとは、前項にも一言したが。實に事物は、見地の異なるに依りて、如何やうにも解釋することが出來る。

併し前題したる張若虛や、僧西行や、はたバットラーや、さして見地の相違を認めぬけれど。古今同光、萬里一色の月に對し、なか〳〵觀察の方法を異にせるものがある。

『人攀明月不可得、
　月行却與人相隨』

之れなどは、眞に理屈一遍、奇といへば奇想ぢやらふけれど、よくも斯んな理屈が言へたもの。察するところ、斯く吟じた李白は、餘程の理屈家としか受け取れぬ。

『獨座幽篁裏　　彈琴復長嘯、
　深林人不知　　明月來相照』

之れに依りて、王維の俤を忍べば、如何にも幽居孤樓、眞に浮世を他(よそ)にせる、失意不平の隱遁者たるを認識することが出來る。『明月は攀づ可からず』と『明月は來りて友と成る』とは、隨分甚だしい思想の相違ではあるまいか。

『ながむるに物思ふことの慰むは
　月はうき世の外よりやゆく。』

と詠じた爲基は、月に對し、言ひしらぬ慰藉を受けた人。之に反し

『見るたびに、昔のことのおぼゆれば
また其のまゝに月もながめす。』
と歌つた基俊は、月に依て、言ひしらぬ苦痛を催した人。特り月のみにあらず、一切の事物、之を見る人の心に依りて、黒くも、白くも、面白くも、無趣味にも、何とでも映ずるのだ。されば『詩人の見るもの、一として詩ならざる無し』と謂ふやうな、極端な言さへ生じたのである。

電車も其の通り。たとへ觀察力を有する者には、如何にも社會の好縮圖と映じ、多大の趣味を感じ、また尠なからざる敎訓をも、看取し得るであらふが。其の見地の異なるに依て、其の享くるところの趣味も、はた看取するところの敎訓も、おのづから其の類を異にするは勿論である。遮莫觀察力は、啻に成功者の資格たるのみならず、實に娯樂の源泉たる價値をすら有して居るのだ。

由來人の命數は、平均四十か五十のところ、六十、七十に達するは、先以て稀なる部類に入れねばならぬ。勿論四十、五十の命も、決して短いと謂ふ譯では無い。尤も道行では無いか。
『朝がほを何はかなしと思ひけむ
人をも花はさこそ見るらめ。』
などと悲觀し始めたら、到底一日たりとも、平安な生活が營めたものでは無からふ。此處は矢張り醉吟先生白樂天に倣ひ
『松樹千年終是朽
槿花一日自爲榮』
底の大悟(?)が欲しいもの。

夫れはさて置き。人若し精細なる觀察力を有し、朝暮、去來せる萬般の人事、一切の事物に就き、趣味を感得し得ることが出來たら。たとへ四

十に達せず、三十に達せず、世俗よりは夭死せりとして哀悼せらるゝこも、其の生涯は、極めて意味あるものとなるであらふ。

要するに樂天の生活と云ふも、斯くの如く、萬般の人事、一切の事物に就て、趣味を感ずることさへ出來れば、哲學の上では何と云ふとか、宗敎を以て論ずれば、どうぢやとか、そんな七面倒臭い議論は、全く拔きにして既にちやんと、健全なる樂天的生活を營み得るに定つて居る。一休禪師、這般の消息を語りて曰く

『南無釋迦ぢや、娑婆ぢや
　地獄ぢや、極樂ぢや
どうぢや、こうぢやと
　謂ふは、ぐじやぐじや。』

兎角理屈は言はぬもの。

あゝ北極の都ダン市を發し、南極の都ベエルシバ市に到るまで、終日はた終年

『不毛の地のみ』

と嘆せる旅人の身の上、誰か爲めに數滴の紅涙無きを得やう。實に彼は、觀察力乏しく、從て事物に就き毫も趣味を感得することが出來ず。たとへ花笑禽語の樂園に入るも、はた麗日和風の原頭に立つも、何らの美感を催す無く、到るところ落寞荒涼不毛の地。あゝ斯くの如くにして何人か能く樂天的生活を營むことが出來やう。

而るに精細なる觀察力を有し、一切の事物に就き、必らず趣味を享受し得るの人は、たとへ茫々無邊一色の沙漠に在るも、猶ほ能く多大の趣味を享受し得るのだ――たま〳〵マーツルの樹蔭に到らんか、彼や必らず、濃綠の涼蔭に對し、赤誠よりマーツルに感謝するであらう。是に

於てか非心無情の樹木も、彼に取りては眞に友情あり、慈心ある人格を有することになるのだ。

あゝ迅雷に樂しみ、烈風に樂しみ、怒濤に樂しみ、疾病に樂しみ、慈母に樂しみ、知己に樂しみ、終生忻々として、終に死を樂み。樂みながらに墓中に安眠するの人。そも〳〵精細なる觀察力を有せずして、安くんぞ能く斯くの如きを得るだらう。人若し樂天的生活の秘訣を尋ぬるあらば、僕は最も大膽に

『汝の觀察力を修養せよ。』

と答ふるのである。

『二十世紀の散歩姿』

上來説述せるところに依りて、觀察力の、如何に必要なるかは、旣に賢明なる諸君の、略察せられたるを信ずるのである。と言て、敢て僕が、自から緻密なる觀察力を有するが故に、斯くの如く、電車の側面觀察などいふ、頗る至難なる人事を完ふせりなんかと、自惚れる譯では無い。

ところで、僕の側面觀察眼に、最先に映じたのは、實に一青年と一淑女のカップルであつた。青年は、會社か銀行へでも、勤務して居るらしい小僧――否、小僧とは以ての外な暴言、實に歷々の少壯紳士。淑女は、裁縫女學校の學生か、若くは電話交換手か、或は同じ會社の事務員か。勿論御身分などは、深く詮議する必要は無い、兎に角、まだ乳臭の去らぬ會社員と、やつと肩上げの取れた女學生とが、何の目的か大に澄し込んで御坐る。

電車に乘り込む態度から、切符を買ふ工合、さては腰を掛くる風附、何處までも御本人は、二十世紀の紳士は、斯くの如しと言はぬばかりの顏附

嘸や嘸御得意に在さるゝであらうが。僕等をして言はしむれば、洵に是れ、喜劇の好材料、さなくんばパックの好資料。何の事は無い、笑ひ話の好い種である。

何思つたか會社員、聞えよかしに

『日比谷公園で日の沒するを待ち、ホテルで晩餐としやうかネ。』

斯く言て一段と氣取る。

會社員の、直ぐ前に席を占めて居た、新聞記者らしい男。物好きにも程がある。

『紳士閣下、私は此の年になつて、遂ぞ一度ホテルに入つたことが無い、眞に憫然な動物です。どうか御無理でも、御伴を願ひたいもので………』

會社員、ほと〳〵困難の體。されば、さて今更、

『今のは一時の笑談です』

とも言ひ兼ね。また、乳臭い青二才の身として、箸にも棒にもかゝらぬ、新聞記者を一喝し

『勝手に御越しなさい』

とも言ひ得ず。さつと紅葉を顏に散らし

『では、御伴願ひませう。』

無邪氣な風體。甚だ可愛い次第である。惟ふに意地の惡い記者殿、心中必らず

『罪の無い奴だ。可愛相に、いぢめねばよかつた。』

と後悔して居るに、相違無からう。併しカツプルは、心も心ならず、悄然垂首して、時々只ならぬ嘆息を洩しつゝあるのだ。

やがて電車が、内幸町に着くや、會社員、恐る〳〵新聞記者に向ひ

『時間が、まだ早いですから、公園で散歩する積りです。』
記者殿、極めて冷然として
『左樣でしたか。では切角ですが、私の方が時間が無いですから、また御緣があつたら、此の次に御願ひ致しませう。』
斯くと聞た時の、兩人の喜悅は如何ばかりであつたらう。さて〳〵浮世は邪魔物が多いもの。
鴛鴦の遊びよろしくと言つた體で、今しも、人氣無い樹蔭に來るや、女學生、聲を殺して
『ホテルは虛言なんでせう。若しあの方に來られたら、どうなさる積り。私ほんとに、はら〳〵思てゝよ……惜しいことハンケチ忘れて。』
『僕も弱たよ。うつかり虛榮はすべからずだ……併し善い教訓ぢやつた。』

十二圓か十三四圓しか取れぬ雇員のくせに、柄にも無いホテルの晩餐とは、能くも言へたもの。併し或は是が現社會の常狀ではあるまいか。實に電車中のカツプル、側面觀察者は、之を以て、虛榮心旺盛なる、現代の思想を、最も適切に表彰せるものと、斷言して憚らぬのだ。若し夫れ
『御差支無ければ、妾宅に御立ち寄り下さい。』
と言はれたのを、眞に受け
『差支どころか、是非共御願ひ致したいものです。』
なんかと出やうなら、早造『世辭に通せぬ男。度す可からざる愚物ぢや』と貶され。たとへ如何なる才があらうが、また如何なる博學だらうが、眞に敗履も啻ならず、見限らるゝは察するに餘りありだ。

『處世成功策』

如何なる時代といへども、また如何なる人といへども、苟くも聖人ならざる限り。人として多少虛榮心を有せざるは無からふ。實に虛榮心は人類のみならず、高等な動物には、必らず是が存在を認識し得るのだ。殊に牛とか、馬とか、犬猫などゝ來ると、其の虛榮心は、往々人間以上かと思はるゝ場合がある。

或る片田舍の祭禮に、古來の慣例として、牛を盛裝して行列を造り、どんちやん囃いで、近郷近村を練り廻ることに成て居る。

ところで行列に加はる牛は、赤やら、青やら、五色七色の巾で飾り立てられ。胸の邊には、澤山な鈴を附ける、角は黃金色の紙で卷くと言つた風で、なか／＼凝つたもの。而して斯く盛裝せられた牛は、意氣揚々、人間で言へば、一躍王侯の位にでも達した者の如く、其の容態振つて歩く工合は、眞に見物であるのだ。

意氣揚々大に容態振てくれるのは、惡いどころか、却りて趣味ある譯だが。祭禮の明日、いよ／＼鈴も取られ、黃金色の紙も失くなり、裝飾殘らず奪ひ去られ赤裸々の牛に成ると。何だか妙に意地張て、一向人の言ふやうに成らず、宛然、禁じ難き不平でもある樣子である。斯くの如きは勿論牛ばかりでは無い。現に正月二日、初荷の馬は、平素の幾割大の力を出し。また猫に奇麗な飾してやると、通常の倍三倍も戲れ出すのだ。要するに、祭禮の牛、初荷の馬が、奇麗に裝飾せられて、斯く得意がるのは、決して『好美心』と謂ふべきものでは無く、實に『虛榮心』の結果に外ならぬのである。

牛馬に於て既に斯ふとすれば、人間の虛榮心が、如何に旺盛なるかは、誰

とて想察することが出來るであらふ。

惟ふに會社員が、素寒貧な財布に拘らず、是れ聞けかしに『ホテルの晩餐』を口にしたのは、最も能く、現代の虚榮心を表白したものと見べきである。既に虚榮心や、現代に在りて、斯くの如く甚だしいとすれば。現代の社會に處し、光榮ある生涯を送らんとする者、徒らに仁義を口にしたり、任俠を重んじたりするのみでは、到底多幸多福の生涯を送り得べくは見えまい。

何しろ湯屋の三助も、學校の先生も、荒物屋の神さんも、はた耶蘇教の坊さんも、皆是れ虚榮心の權化。自から、自己の眞價を顧みず、矢鱈に、外見を飾ると共に、人を判斷するにも、毫も人の眞價を察せず、偏へに外見をのみ念とするのだ。從て常識を有する者、誰とて勢ひ

『內實はどうでも、見懸け丈は立派にせねばならぬ。』

てふ、眞理に想到せざるを得ぬ話。實に小學校の敎員でも、オペラハットに燕尾服と御坐れば、知らぬ行路の人は、たゞ『先生』と呼ぶのを聞て、大學の敎授位に優遇するは、分り切つた事。懐中に二錢銅貨一つ無くとも、金縁の眼鏡は、懐中に千圓を藏せる、ニッケルの眼鏡より、遙かに厚遇せらるゝは、實に現代に於ける公理である。たとへ『人は見懸けに依らぬもの』との俚諺をして、依然其の存在を許すにしろ、猶ほ『人は見かけが何より』の言は、洵に一定不易の眞理として、赫々の光輝を失はぬのだ。

試に電車に於て、這般の消息を精察したら、極めて明白に了解することが出來るであらふ――婦人には、席を讓て下さいと、麗々しく書き立てゝあるに拘らず、其の服裝でも如何はしいと、啻に席を讓與せざるのみか

『妙な臭氣を發する婦人ぢや、電車になぞ乗る身分で無い。』

なんかと、飛んだ皮肉な考をすら懷くのだ。併し席を讓ると、讓らぬとは、素より乘客の隨意、敢て咎むる譯には往かぬ。されど車掌の野郎が、いけすかない馬鹿面してキヨロ〳〵人の服裝を眺め。若し垢ずんだ木綿衣でも着て居らうものなら、三度も四度も、空しく

『車掌さん、切符下さい』

と、手を出させるでは無いか。

且つ電車に乘り、其の席を選ぶにも、御同樣、奇麗な服裝せる乘客の隣りを採るのだ。實に『見かけは、』處世の祕條、成功の要訣と言てもよい位。此に所謂『處世成功策』とは即ち

『汝の見かけを善くせよ』

の、極めて單純なる一句に過ぎぬのである。

恐く諸君は、門前拂など喰はされた經驗は無い筈。されど氷屋の女中に依りて、比較的薄遇せられた經驗位はあるだらふ。要するに、門前拂を喰はさるゝも、はた比較的薄遇を受くるのも、實に『見かけが惡い』てふ、一事に基因しては居まいか。

チヤールス、キングスレーの

『美なる服裝は、惡心を匿くす』

と言つたのは、悉く然りと斷言することは出來ぬけれど、而も之を否定するには、餘りに社會が『見かけ』を重視しつゝあるのだ。たとへジンマーマンは

『華美なる服裝や、美婦は之に依りて得るところ殆ど無く、醜婦は失ふところ大なり。』

と言ては居るものゝ。苟くも虛榮心にして、斯くばかり旺盛なる社會に處し、處し得て空しきを得んが爲めには、文士も、政客も、商人も、農夫も、

共に齊しく、身分相應『見かけ』を飾らざるを得まい。然れども事物の善美が、悉く程度に因りて保留せらるゝは、忘れてならぬ。殊に『見かけ』を餘りに重視し、身分に想應せぬやうな場合には、實に却りて物笑ひと成ることが多いのだ。

『アーメン式お姫樣』

現社會に於て、虛榮心が、いかに旺盛なるかは、以上說くところに依りて、既に十分なりと信ずるのだ。是も亦、虛榮心の一種には相違無いが、側面觀察者は、アーメン式お姫樣に就て、一段深く社會の趨勢の『或る物（サムシング）』を察知し得たのである。

惟ふに諸君は、電車中に於て、屢ゝ女學生の、之れ見よかしに、橫文字の書籍を繙けるを目擊し、爲めに尠なからず嘔吐の感を催したであらふ。と言て現代の淑女が、橫文字の書籍が讀めぬやうでは、甚だ慨歎すべき次第ではあるまいか。さりとて女は、何處までも女らしくありたきもの。幾ら光陰は矢の如くに去り、一時、千金を積むも替え難しとは言へ、電車の中での讀書と來ては、心ある者、誰とて少さかウンザリせざるを得まい。

併し斯くの如きは、決して女學生諸君の過失では無く、實に現代の社會思想が、遂に天眞爛漫、無邪氣なる諸孃をして、斯る嘔吐すべき態度を取り却りて榮とするに至らしめたのである。殊に蝶子孃の如きは、毫も非難すべき點を見出し得ぬのだ。

蝶子孃は、たしか女子大學の生徒で、國文科か、英文科かは知らぬけれど、何でも文科生。學識の點は、未だ實際檢したことが無い故、其の優劣、此に斷言し得ぬが。御見かけ申したところは、天晴（あつぱ）れ閨秀文學者。未だ

曾て戀した例も無ければ、また戀せられた味も知らぬ僕さへ、

『品のよい。令孃だ』

と惚れ〳〵する位である。

少し怒つた方の肩に、えも言はれぬ、凛々しい威嚴を宿した、肉附の至てよい、血色の極めて美しい、十七か八の女學生。面ざしは、少しきつい方だが、口許に何とも言はれぬ愛嬌あるため、一段と美しさを加へて居る。頭髪は勿論當世最新流行の何とか式。眞紅の、あまり大きからぬ薔薇一輪、後ざまに飾し。雪を詐く巴里式の化粧には、金緣の近視十二三度の眼鏡、之が甚だ映り善く。思切て大柄な、而も寂びずんだ地色のお召縮緬、白襟の重ねを、ルビーのピンで止め。袴は、昔戀しき濃紫、地面を曳くばかりに着け。四枚重ねの草履、靴よりは遥かに奥床しい心地するのだ。日傘は、獨逸製のダークレッド、日本婦人には、ちと面耻しい方だが、さすがは蝶子孃、却りて得意の風が見ゆる。一言以て是を蔽へば、即ち千人は千人までが、人好きのする當世風のお姫樣。傾國の美人と申し上げたところ、滿更とは思はれぬ尤物である。

蝶子孃、七歳か八歳で兩親に別れ、今では兄と二人棲居。ところで其の兄と言ふは、英國出身の少壯有爲の政客で。是まで、新聞社とか、學校、會社等より、非常に高額なる報酬を以て、幾度となく招致せられたが。先生大に高く止まり

『未だ時機にあらず。』

と、遂に諾したことは無い。年三十、今以妻を迎えず。只管交を知名の士に結び、閑あれば即ち讀書三昧に耽けり、時に電筆を馳せては、外交を論じ、國政を論じ、文學を評し。其議論も批評も、なか〳〵重視せられてあるのだ。惟ふに臥龍の士とは、蓋し彼の如きを謂ふのであらふ。何

曾て戀した例も無ければ、また戀せられた味も知らぬ僕さへ、

『品のよい。令孃だ』

と惚れ〳〵する位である。

少し怒つた方の肩に、えも言はれぬ、凛々しい威嚴を宿した、肉附の至てよい、血色の極めて美しい、十七か八の女學生。面ざしは、少しきつい方だが、口許に何とも言はれぬ愛嬌あるため、一段と美しさを加へて居る。頭髮は勿論當世最新流行の何とか式。眞紅の、あまり大きからぬ薔薇一輪、後ざまに飾し。雪を詐く巴里式の化粧には、金縁の近視十二三度の眼鏡、之が甚だ映り善く。思切て大柄な、而も寂びずんだ地色のお召縮緬、白襟の重ねを、ルビーのピンで止め。袴は、昔戀しき濃紫、地面を曳くばかりに着け。四枚重ねの草履、靴よりは遙かに奥床しい心地するのだ。日傘は、獨逸製のダークレッド、日本婦人には、ちと面耻しい方だが、さすがは蝶子孃、却りて得意の風が見ゆる。一言以て是を蔽へば、即ち千人は千人まで、人好きのする當世風のお姫様。傾國の美人と申し上げたところ、滿更とは思はれぬ尤物である。

蝶子孃、七歳か八歳で兩親に別れ、今では兄と二人棲居。ところで其の兄と言ふは、英國出身の少壯有爲の政客で。是まで、新聞社とか、學校、會社等より、非常に高額なる報酬を以て、幾度となく招致せられたが。先生大に高く止まり

『未だ時機にあらず。』

と、遂に諾したことは無い。年三十、今以妻を迎えず。只管交を知名の士に結び、閑あれば即ち讀書三昧に耽けり、時に電筆を馳せては、外交を論じ、國政を論じ、文學を評し。其議論も批評も、なか〳〵重視せられてあるのだ。惟ふに臥龍の士とは、蓋し彼の如きを謂ふのであらふ。何

しろ有爲の士である。殊に遺産として、數十萬の財産を藏して居る話、眞に幸福な男さ。

蝶子孃、兄に似て、なか〳〵氣品が高い。何といへば

『私、御亭主に因りて、運命を決するやうな、そんな意氣地の無い婦人は嫌ひです。幾ら女でも、自分の運命は、自分で開拓するのが道理でありますまいか。』

斯う衝天の意氣を吐くのだ。之を聞たら、そんじよそこらの、自然主義にかぶれた、ハイカラ學生、グーの音も出まい。

風采から言へば、ハイカラの骨張。星の光と、菫の薫とを以てすれば、何の譯なく、風に靡く柳の糸と來そうだが、實際は案外。紳士の典型を以て任せる兄に感化せられたのか、但しは武士氣質の兩親の氣質を遺傳したのか『幾ら女でも、自分の運命は、自分で開拓せねばならぬ』と壯言した如くに。孃の念頭は、全く高遠なる理想に支配せられ、眼中、更に男子は無いのである。

現に筋向に當る富豪の長男、文科大學のハイカラ學生、大た蝶子孃に參つたので。爾來二年品を代え、手を盡して意を寄せたが、何時も同じく素氣無い素振り。長男殿、遂に思ひ切つて、一夕孃を學校の歸路に待ち構え。姿を見るや、突然手を握つて

『蝶子さん、あなた餘り無情ぢや・ありませんか。私も、資産あり名望ある家に生れ。耻をも忘れて、斯ふあなたの愛を求むるのは、實に容易なことではありません。少しは私の意中も御推察下さい。』

泣かぬばかりである。

斯ふ來られては、普通の處女なら、驚て逃げ出すか、さも無くんば、聲を發

して救ひでも求むる場合。さすがは蝶子孃である、極めて冷然と構へ
――と言て、ずれつからしの女學生らしい點は、毫末も見えぬ。そが凜々しい顔せに、一段の威嚴を示し

『さう、まで愛して下さるのは、何とも御禮の申上げやうも御座いません。併し女子は、男子と違ひまして、十倍も百倍も身を愼まねばなりませぬ故。輕々しくあなたの愛を受くる譯にまゐりません。何れ兄とも相談して……』

斯んな事、人の兄に相談されてたまるものでは無い。長男殿、茫然佇立して、蝶子孃の後姿を、つく〴〵見送て居る。

由來、ハイカラと輕浮とは、恰かも離る可からざる、關係でも存するが如くに解せられ。ハイカラとさへ言へば、一言の下に

『對手にするなよ。』

位な警告を與へらるゝのに。不思議なことには、ハイカラの隨一と謂ふべき蝶子孃、一向輕浮な樣子も見へず。實にダークレッドの日傘も濃紫の袴も、金縁の眼鏡も、何れもわざとらしからずして、却りて孃の品位を高むるのだ。

電車中の視線を一身に受けながら『何の平民共』がと言はぬばかりの顔付。ツンと澄まして、何やら詩集らしい英書を繙ける工合、何處までも洋行歸りとしか受け取れぬ。ヅウ〳〵しいと言へば、ヅウ〳〵しい頂上、開けたと言へば、此上無く開けた淑女、兎に角常人では無い。アーメン式お姫樣とは、孃の如きを謂はずして、何人を稱すべけんやだ。

曾て學校の生徒監が、蝶子孃を評し

『馬車に乘せて、伯爵令孃とでも申し上げたい。』

と言つたことがあつたそうだが、僕も同感である。

『理想的女學生』

アーメン式お姫樣と言へば、其聲や、善くも聞え、また惡くも聞ゆるのだ。併し之を以て善意に解すると、惡意に解するとは、人其人の御勝手。僕は素より、蝶子孃を惡しざまに、斯く申しあげたのでは無い。

試に想ひたまへ――ハイカラは現代思想の一致するところで。恰かもハイカラならずんば、當世の事、語る可からずとでも言つたやうな工合。かるが故に、元來虛榮心の旺盛なる婦人連の、地位も忘れ、身分もそつちのけにして、矢鱈無性にハイカラたらんとする、蓋し己むを得ざる事理であらふ。而して處女にありて、ハイカラの最上なるは、僕の所謂アーメン式お姫樣である。ところが此のアーメン式お姫樣は、容易に摸倣することが出來ぬもので。第一十分の資力、次に學力、次に容貌實に此の三者が完備しなくては、完全なるアーメン式お姫樣は出來ぬに定てゐる。

甚だ恐れ多い話だが、貴顯紳士の御令孃にして、十分ハイカリズムを咀嚼せられた方々は、皆是れアーメン式お姫樣であるのだ。 蝶子孃や、學力の點は詳しく存せぬが、兎に角十分の資力もあれば、容貌よりするもなか〳〵得がたい美人、學問も相當と來たので、遂斯くの如くハイカラの純たるものと成り、能くアーメン式お姫樣の典型たるを得たのであらう。 併し孃は、耶蘇敎が大嫌いである。

今若し『理想的女學生』とでも言つたやうな語を用ゐたなら、蝶子孃の如きは、まさに理想的女學生に相違あるまい。 或は女學生諸君をして、艶羨の情に堪えざらしめ、却りて僕に對し

『餘計な事を書く奴だ。』

などゝ、意外な非難を發せしむるか知らぬけれど、筆の序、孃の日常生活を描寫することに致そう。

四疊半の、小ぢんまりとした床があり、丸窓があり、夏の涼しそうな孃の書齋は、是れ亦た甚だハイカラ式で。兄のと共同でもあらふが、約百冊の英書が、きちんと列べあり。ネルソン百科全書の棚の上には、米國の何やら婦人雜誌が、號を追て積んである。朱塗りの机は、母の遺物。机上にある薩摩燒の一輪ざしには、未だ曾て花の絶えた時が無い。英國土産の額面三枚、何れも風景畫。机の右手に在る卷繪の書棚は、去年百圓近く張り込んで購入した、孃に取て最も大切な道具。其の上には、兩親の寫眞と、硯箱、一寸ばかりの京人形、七寶の一輪ざし、卷繪の指輪入れ、都合十二三點の品が、順よく飾られてある。亦の勝つた座蒲團、夫れに座つた天女のやうな蝶子孃の姿は、まさに之れ書中の人。

書齋の隣り、同じく四疊半の一室は、孃の寐間兼化粧室で、是れ亦なかなか凝つたもの。母の遺物の、總桐の大簞笥一個、金卷繪の姿見、之は西洋人向に出來て居る。洋式の小簞笥は、兄が英國から求めて來た品。金緣の六枚折には、四條派の花鳥が、いかにも賑はしく書かれてある。紫檀の三尺臺が、室の東隅にあつて、其の上には、一輪の薔薇に接吻せる、佛國婦人らしい、大理石の全身像が立て居る。

書齋と寐室とは、屹度毎朝、自分で掃除することゝ成つて。掃除が濟むと、湯殿で冷水摩擦。夫れからお化粧。起床後一時間半位で、朝食を喫するのだ。孃は新聞を讀む時間が無いので、兄は、社會の重要なる時事を、必らず朝の食卓で話してくれる。

學校から歸れば、兄には關はず、必らず毎日入浴し、浴後二時間位は書齋に閉ち込もつて居る。晩餐は通常六時から七時の間。

晴天で、兄さへ差支無ければ、乾度散歩をするのだ。　散歩に出かけぬ夜は、應接間でピアノを彈ずるのが常例である。

兄と同じく、讀書に耽けり、十二時一時に達することは珍らしく無い。

交遊は尠ない方である。　と言ふのは、孃や心中――斯る賢明博學、夫れに溫厚な兄を有するので、別段友を欲せぬのであらふ。　且つ孃の如き氣位の高い、夫れに斯んな貴族的生活を營んで居る者は、どうも友達が出來にくいのが常。　是まで學友にして、孃の家を訪れた者も澤山あるが、何れも餘り珍客あしらひを受くるのと。　今一つは、孃が幸福なる生活を欽羨するのとで、再び三度訪門した者は皆無である。　併し兄の知人の、孃さんとか、妹さんとかは、屢々訪れてもくれるし、また孃も訪れる。　けれど之は、學生としての交遊では無くて、實に社交と言ふべき類であるのだ。

前にも斷て置た通り、孃の學識は、優か劣か存せぬけれど。　讀書は好きであるし、夫れに兄から、東西文學の談話を、常々聞きかぢつて居るので、學績はどうあらふが、年頃の處女としては、必らず博學の方に違いなからふ。　何しろ氣品の高い質なのと、容貌が甚だ高尙なので、誰が見ても學識の豐富な賢女としか受け取れぬ。

夫れから、極めて氣品の高い割合に、一種言ふべからざるチャームがあるし。　加之らず口數が少ないため、男よりか女の方が、より受く好もしく思はるゝのだ。　且つ生活が豐かなので、自然態度に餘裕が備はり。物を贈るやうな場合には、眞に惜氣も無く、どつしりしたことを見せ。金錢上の話は曖氣にも出さぬと言ふ、誠に、どんな高貴なお姫樣と稱えても、少さか不思議は無い。　日外某子爵の母堂が、孃を評して

『昔大名の姫樣は、あんな風でした。』

と言つたのは、曾て女子大學の生徒監が

『馬車に乘せて、伯爵令孃とでも申上げたい。』

と評したのと共に、確かに適確なる月旦と呼ぶことが出來る。

アーメン式お姬樣の日常生活は、以上說くところに依りて、略々想察することが出來やふ。而して僕が、敢て孃を以て理想的女學生と稱す、蓋し女學生諸君の、齊しく首肯せらるゝところであらふ。

獨逸の俚諺に

『女兒は生母に酷似す。』

といふのがあるが、孃の如きを產んだ母は、果して如何なる婦人であつたらふ。素より明治生れの人では無い筈ぢやが、必らず粹な、當節の所謂ハイカラ令夫人たりしは、容易に察知することが出來る。

『當世孃氣質』

アーメン式お姬樣、必らず電車の中で、洋書を繙くのだ。人は以て虛榮心の骨張なりと、思惟するであらふが、御當人は平氣なもの、當然の事と信じて居るらしい。

一日學友某が、孃に向ひ

『あなた、電車なんかで、英書を讀んで、極りが惡くありませんか。』

と詰ると、孃は相變らず、極めて平氣で

『ちつとも……漢籍か歌集でも讀むのならば、何だか學者振るやうですけれど。現に學んでる英書を讀むのは、何でも無いぢやありませんか。』

理屈は、勝手に附けられるものである。併し孃の斯く應えたのは、決し

て辯を好むの故では無く。實に何處までもハイカラ流義な孃の思想が、最も明白に裸出したものと、見るのが至當であらふ。併し世の中には、隨分と旋毛曲りの人が多い者故、斯る言を耳にしやうものなら、必らず

『生意氣も程がある。』

などと、てんで相手にせぬかも知れぬ。遮莫、今時の娘さんは、何しろ大した理屈をおつしやるものである。

フォルダイスは、妻を選擇する最大條件として『父母に溫順』なるを以てし。父母に對して溫順なる處女は、嫁しての後、たとへ如何なる境遇に在るも、必らずや婦人の美質を保留し、主婦として、はた母として、能く其の任務を全ふすべきを斷言して居る。

こは實に、古今東西、思想の一致せるところ。女子は、妻となり、母となりて、完全にその責務を全ふすべきものとすれば、フォルダイスの言や、高遠に落ちず、卑近に流れず、眞に聖人また出づるといへども、其の言に從ふは明白である。

而るに當世の娘氣質は、妻となりて、どうするとか。母となりて、どうするとか謂ふやうな考案は、毫末も之れ無く。實に其の善なる者にありては

『如何にして名譽を得べきか』

と苦心し。善ならざる者に至りては

『如何にして贅澤し得べきか』

と焦慮しつゝあるのだ。從て、夫君選擇の見地も、甚だ利己的で、即ち前者にありては

『斯くの如き男子は、妻をして高名を享受せしむるに足れりや。』

後者にありては

『斯くの如き男子は、妾をして贅澤せしむるに足る資金を給し得べきか。』

などと、熟慮沈思するのである。蝶子孃に至ては、蓋し善者にも屬せず、また後者の類にもあらず。どだい夫君などは、孃の眼中に之れ無しと謂ふべきだ。要するに孃は、朝々暮々

『如何にして、男子以上の事業を成し得べきか。』

てふ、眞に非凡超俗的、大理想(?)を有して居るのだ。兼行法師の『すさまじき女』とは、之れ洵に蝶子孃の如きを、意味しては居らぬだらふか。孃の如きは、確かに、男子に取りて恐怖すべき人類であらふ。

女子にして、高名を理想とするが是か、贅澤を理想とするが是か、但しは蝶子孃の如くに、男子以上の事業を以て、其の理想とするが是か。斯んな難かしい問題は、勿論僕等の常識には、解し得やふ筈は無い。併し何分にも時勢の力には抵抗し能はざるもの。既に英國では、女子に參政權をすら附與するとか、せぬとかでやんやと騷いで居る始末。して見れば、男子以上の事業を以て、其が終生の理想となす位は、之れ素より理の當然であらふ。況んや蝶子孃が、電車の中で、英書を繙く位は、何の不思議とてあるまい。

僕をして言はしむれば、蝶子孃の如き、男まさりの女は、女子の爲め、はた男子の爲め、むしろ双手を擧げて、其の健康と幸福とを祝したい程である。要するに氣品を高く持ち

『女でも、膽はあります。』

と剛語し、有鬚男兒をして、辟易せしむる底のハイカラは、眞に女丈夫として推賞せざるを得まい。女子は、幾ら溫順が善いと申ても、意氣地無

しでは話にならぬ。

『電車で見合』

『女子は見る可し、聞く可からず。』

之は丁抹の俚諺である。至て膚淺のやうだが、よく味へば、なか〳〵理趣の深長なるものあるを認むるのだ。

由來百聞一見に如かずとは、誰しも口癖に謂ふことだが。殊に女子に於て、最も其の眞に然る所以のものを認むるやうである。實にどんな女子でも、所謂『鬼も十八』の眞理に適合し、嫁入前、處女の時代には悉く美人で。恰かも『處女』とは、即ち『美婦』を意味する傾きさへ認め得るのだ。されば賢明なる丁抹の古賢は『女子は見る可し、聞く可からず。』てふ、千載不滅の金言を與へてくれたのであらふ。要するに『聞て極樂、見て地獄』とは、女子に於て、甚だ屢々確認せらるゝ俚諺である。

蝶子孃と、よく同乘する、同町內の吳服屋の娘、今年本郷邊の裁縫學校卒業すれば、早速某銀行家の令夫人と成るとは、實に一昨日の晩定つた話。併し先方は、未だ一面の識さへ無いのだ。

ところで此の娘さんは御面相ばかりで無く、御容態までも甚だ品が惡い。勿論御本人は、何處までも日本一の美人な積りであらうが。善い衣裳を着くれば、夫れ丈け見劣りせらるゝと謂ふ、誠に下卑な生れ附。夫れにも拘らず、いくら高慢は。人間の通性なりとはいへ、殊更蝶子孃の向を張る積りで、孃と同乘する度每、必らず相並んで席を取るのだ、鴉と鷺、眞に見られた對照では無い。去りながら吳服屋さんだけあつて、衣裳の點に於ては、蝶子孃に比し、優さるとも、決して劣ては居らぬ。

此の娘さんを貰ふ筈の銀行家殿、未だ曾て丁抹の俚諺を聞かなんだと

見へ。巧妙なる媒酌人の口車に乘せられ、早速承諾はしたものゝ。何しろ結婚は人事の大禮、偕老の契を結ぶべき處女、いよ〳〵式を擧ぐるに先だち、是非一度御當人を見て置きたいと言ふので。今朝、娘さんが登校の途次、電車の中で尊顏を拜し奉ることと成つた。

花婿殿は、媒酌人に伴はれ、三十分も早くから、停留場で待て居る。そうかうする內、丁度一町位離れて、花嫁殿、大に氣取て、家鴨(あひる)の歩みよろしくと言つた風附で、御成り遊ばされた。之れを見るや、媒酌人は

『向から來る、色白のハイカラです。』

と敎へ、私か居ては甚だ不都合でせうと、大急ぎに急ぎ去つたのだ。取り殘された花婿殿、ネクタイは曲つて居らぬか、靴の紐は解けて居らぬかと、キヨロ〳〵自分の姿に注目し。次第〳〵に近づく、近き將來に於ける吾が新嫁を待て居る――段々近づくのを、夫れとは無しに眺むれば、誠に氣高い、絕世の美人。いよ〳〵停留場に御着きになつた際には、三十男にも似合はしからず、顏を赤らめたのであつた。併し心中のプライドは筆紙の盡し得るところでは無い。

『斯んな美人を妻にする吾輩は、眞に幸運兒中の幸運兒ぢや。』

と自惚(うぬぼ)れながら、愈々電車に乘る。もう御亭主氣取りで、殊更、花嫁殿の隣席を占め、機會あらば、一口二口言葉を交(か)はす覺悟。

電車は搖き始める。花嫁殿は、御自分の隣席に未來の夫君が居るとは、夢にも察せぬやうな風で、英書を繙き、人目も憚らず讀書に餘念が無い。えも言はれぬ芳香、まるで魔神に施さるゝ醉藥の如く、花婿殿の鼻を打つのだ。もう恍惚として自失し。妙に身拵へして

『もし御令孃。失禮ではありますが、御用ゐの御香水は何でございますか。非常に好い香を發するですナ』

斯く言はれた花嫁殿、恰かも

『知らぬ處女に、車中で言葉を發するとは、失禮ではありませんか』

と言ふが如く、其の澄み切つた眼に、犯すべからざる威嚴の光を發ち。はつきりした語調で

『香水ではございませんの、パストマック。』

再び讀書三昧に耽ける。

花婿殿、もどかしさの餘り、今度は話頭を轉じ

『御本は詩集ですか。なかなか難しいものを御覧ですな。』

乘客の視線は、悉く花嫁花婿兩人の上に集注して居る。車隅に席を取て居た、法學生風の男二人、小聲で

『あの赤のネクタイ、餘程の自然主義者だ。』

之は無理ならぬ評言であらふ。

花嫁殿、あゝうるさいと言つた體で

『つまらない本です。』

言ひも終らず、つと立ち上り、電車を下りた樣子の凜々しさ。天女の怒は斯くやあらんだ。

* * * * * *

花婿殿が、呉服屋の娘さんと、蝶子孃とを人違ひせるとは、既に讀者諸君の、察知せるところであらふ。つまり孃と娘さんとが、相次で乘車し、前に媒酌人は、只單に『色の白いハイカラ』とのみ言つたので。兼て絕世の美人と聞て居た花婿殿が、實物の側らにあるをも知らず、蝶子孃を以て、未來の令夫人なりと即斷したは、罪の無い話である。何しろ女子は丁抹の俚諺に違はず、見るべくして、聞く可きものでない。

惟ふに斯る、失敗せる電車の見合、またこれ一種の活敎訓と見る點も、無

いではあるまい。

『人生の寵兒』

未だ一葉落ちて天下の秋を知るとまでは往かぬが、柳蔭漸く蔭衰へて、朝な夕な、蕭々梧桐を打つ風の涼しさ。まして衣手寒き夜半、寐覺めて枕邊に聞く蟋蟀の、俄かに弱りたる聲の悲しさ。あゝ世は既に秋である。

秋は物ごとに淋しと、古人今人、口癖に言ふやうだが。さて暑からず、寒からぬ、着心地よき袷時(あはせどき)。林間に逍遙し、野徑を去來する清快、たとへ陽和に發したる春花の芳妍は、見得べくは無いが。而も自(おのづ)ら襟懷を清うし、徐ろに塵想を遣(わす)れしむる、秋の眺めはまた一段である。身は素より騷人の仲間ならずとも、今日此頃の自然の美は、決して捨て得べきものでは無からふ。

由來餅の美を知るは、何曹の右に出づる無く。酒の美を知るは、劉伶の上に超ゆる無きは、萬人の知悉せるところではあるが、而も旨酒蒸餅を以て不美と成す者はあるまい。秋の清趣雅風、また之れ旨酒蒸餅の類、そが眞美眞趣は、勿論文士墨客にあらざれば、解し得やう筈は無からふけれど。人若し一たび往きて、清洒たる秋日の美に接せんか、誰れか自失して、暫し陶然たらざる得やう。

わけて今日の日曜は、珍らしい好天氣。どの電車も殆ど滿員である。往く先は、上野か、淺草か、但しは遠く滊車の便を籍りて、大宮か、鎌倉か。兎に角、十分命(いのち)の洗濯せらるゝが何より。惟ふに斯んな日に、陰氣くさく家に閉ぢ込まり、無事に苦しむなどは、餘程氣のきかぬ話である。

僕の乘り込んだ電車の中で、格別目に着いたは、親子三人連れの腰辨先

生であつた。尤も戸籍を洗はずに、腰辨の即斷、或は意外な失態を招くかも知れぬが。さりとて色の褪めた、前世紀の中葉以前に、流行したやうなモーニングコート。令夫人は、洗ひ晒らしの銘仙。是によりて腰辨の速斷も滿更ではあるまい。

併し、さすがは子にまさる寶が無いだけに。十三か十四に成た位な、至て品の善い可愛い少女。揃へ立てらしい紬の、紫勝つた古代摸樣の袷、思ひ切つて袖の長いのに、朱の丸帶、夫れを矢の字に結んで。わけて多い頭髮を、風のまゝに搖がせ。雪白の足袋を、オリーブの裾から、ほんの少し覗かせたところなど。兩親さへ側に居らねば、誰が目にも、何處ぞ高貴の御令孃が、普通着のまゝ、友達がり遊びにでも御越しなさるところかと、察せらるゝのだ。腰辨先生夫婦や、朝々暮々、只如何にせば、愛女を立派に教育させて、立派な婚を持たせ得るやと、夫れのみに苦心しつゝあるだらふ。

『親は幾ら貧乏しても、子供だけには、貧苦を知らせたく無い。』

とは、蓋し斯る兩親の、半時たりとも、念頭を去らぬ、唯一の願望であるのだ。實のところ今日の散步も、可愛い子供の爲めを思ふてであるまいか。

改めて言ふのが、却りて野暮でもあらふが。命に窮達あり、萬人が萬人、悉く成功の柱冠を享け、富貴顯榮の地位に達し得られやふ筈は無い。之を思はず、やたらに富貴を希ひ、ひたすら顯榮を羨んだら毫も現在に快樂を享受し得ず、實に怨嗟憤嘆の裡に、悶死せざるを得まい。僕は今、親子三人連れの腰辨先生を見、『人生の寵兒』とは、即ち斯くの如き徒に相違無きを感じたのであつた。

去りながら、希望無き者は、精神界に於ける死者である。向上の念、進取

の氣は、誰か不必要と言ふことが出來やう。

『貧交行』

荀くも文學ある男女にして、杜甫が『貧交行』を御存じ無い方はあるまい。方今人情澆薄、兄弟利を爭ひ、墻に鬩ぐの社會。此の社會に在て、少しく心ある者、蓋し日として『貧交行』を長嘯せざるを得ぬだらふ。

『飜手作雲覆手雨　紛々輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土』

※　※　※　※　※　※　※

今を距る五年、僕、今より一層貧苦に惱んで居た頃。家庭教師として、毎夜或富豪の家に到り、其の家の令孃を敎育したことがある。

元來、理性よりは、遙かに感情の勝た僕。到底久しく、七面倒臭き、家庭敎師の任務を全ふし得べき筈は無い。案の通り約一年にして、別段衝突といふでは無いが、少しく面白からぬことがあつて自から職を辭するに至つた。辭して見れば、素より行路の人。

行路の人。況んや爾來五年の星霜を閲して居るのだ。今朝、斯ふ電車の中で、孃と相對して席を取り、親しく面を合はせて居るに。一片の挨拶するで無く。恰かも、何處の貧乏爺かと言はぬばかりの御面相、素より何の不思議は無い筈。且つ當節の御令孃は、まさに斯くあるべきものかも知れね。

去りながら、多感多情の僕、遂に、おりし昔のこと共、夫れや此れやと想起せざるを得なんだ。想起すると共に、紙よりも薄き人情を、且つ恕り、且つ恨まざるを得なんだ。

想ひ起す。風寒き冬の夕、一つの火鉢を圍み、欵語洋々の裡に談笑した

こともあつた――――孃は之を忘れたであらふ。慈善演劇の歸るさ、草臥れたる御身の脚は、幾度か僕の腕を勞せしめたのであつた――――孃は之を忘れたであらう。御身の寫眞は、長へに僕の机上に飾られてある。而して青春の血、未だ冷えざりし當時を追懷するの時、先づ僕の念頭に映じ來たるは、實に孃が麗容である――――孃は僕の俤を忘れたであらう。御身に依りて贈られたる、かの寄木の箱は、舊に依りて僕の机邊を去らず。箱の裏に認めてある『愛子より』の文字は、墨痕鮮かにして之を見る度、僕をして眞に斷腸の思あらしむるのだ――――孃は僕の名をすら忘れたであらふ。

去りながら、斯く恨むのは僕の過失である。多感多情の詩人、在五中將、曾て

『思ふことと言はでたゞにぞ止みなまし
　われとひとしき人しなければ』

と長嘆したでは無いか。あゝ僕ならぬ人を、僕の心を以て責むるもの洵に僕の過失であらふ。さもあらばあれ、杜甫が『貧交行』僕、長へに之を愛吟するのである。

わすれんと
しひておもはじわすられぬ
思のみたそ形見なりけり
　　　　　　　　　　千陰

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

社會側面觀 終

第七章　電車の側面觀

明治四十一年七月廿四日印刷
同　年七月廿九日發行

社會側面觀奥附

正價七拾錢

著作者　波多野烏峰
東京市京橋區南紺屋町十二番地

發行者　增田義一
東京市牛込區榎町七番地

印刷者　大鳥居弃三
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

發兌元　東京市京橋區南紺屋町十二番地
郵便振替貯金參貳六番
實業之日本社
電話新橋八七四番　電話新橋四二九六番（編輯用）

大賣捌所　東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂、至誠堂、大阪盛文館
杉本書店、名古屋川瀬代助、京都東枝律書房、久留米菊竹

不許複製

英國 ゼローム、ケイ、ゼローム著 波多野烏峰君譯

表裏百面 人生の眞相

◎假四拾錢 ◎郵税六錢

◎本書は機警の着想と洒脱輕妙の筆致とを以て有名なるゼローム氏の著を烏峰生獨特の言文一致體を以て譯述したるもの、全篇悉く金玉の文字、之を詩と見れば即ち無韻の詩、畵と見れば即ち無線の畵、趣味教訓兼備の一大名著なり。◎特に例を實際に取り教を活人に求めたるは實に是れ本書の特長、卷を開きて閉づる迄遂に破顔の禁じ得ざると共に毎頁「成る程」てふ感嘆措く能はざらしむ、眞に是れ近時出版界の珍本、萬人必讀の快著也。

實業之日本記者 嬌溢生著

大好評 忽五版

獨笑珍話

◎正價四拾錢 ◎郵税六錢

◎「笑ふ門には福來る」「笑へば肥ゆ」とは卑近の俚諺なるも此中絶大の眞理を含む。笑を求めんと欲するものは速に本書に來れ、蓋し本書の如く讀者を笑はしむるの珍書は世間決して他になからん。◎本書を讀めば厭世家も樂天家となり。沈欝性の人も快濶となり、心機を轉換し精神を開攄す。特に旅中孤獨寂寞を感ずる時之れを繙くの快は他に比あるを見ず。發行以來好評嘖々忽ちにして五版を重ねたる偶然にあらず。

英國 ゼローム、ケイ、ゼローム著 波多野烏峰君譯

人生の半面

◎中版全一册 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

◎本書は六年前初版後百四十三版を重ねし世界空前の珍書を譯述したるもの、小説に似て小説にあらず、哲學に似て哲學にあらず、輕妙の文、奇警の筆、人生問題を縱横說述して餘蘊なし。◎例へば米櫃問題、偉人の裏面、懶惰の樂等悉く奇想天外の敎訓的大漫筆にして一讀噴飯、再讀失笑、三讀して始めて釋然として人生の妙味を解するに至る、蓋し近來の珍書なり。

樋口配天君著

默想

◎中版全一册 ◎假卅五錢 ◎郵税四錢

◎外に大に活動せんと欲せば内に大に沈思する所なかるべからず、外に大に發展せんと欲せば内に大に靜慮する所なかるべからず、源遠からざれば涸れ易く養ふ所深からざれば大成を期するや難し、是れ默想の出づる所以なり。◎默想は文藝宗教社會に善く人生の情理を曲盡したる哲人樋口配天氏の感想錄なり、其の燃犀の眼光奔放の意氣沸々の熱血警世の續謡、現時の文壇を獨歩するの達觀明識と著者獨特の異彩ある高華の文字とは悉く收めて此書にあり、有爲の青年男女は速に一讀せよ。

東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番) 實捌全國書店

(以下實業之日本社發行書目)

辻新次君序 波多野烏峰著
健全なる常識
◎上製金文字入 ◎定價壹圓 ◎郵税八錢

米國大統領ルーズヴェルト氏著 伯爵大隈重信君序 山崎梅處君譯
ルーズヴェルト全集
◎大版クロース金文字入 ◎正價壹圓 ◎郵税八錢

高須梅溪君著
偉人修養の徑路
◎袖珍美本 ◎正價五拾錢 ◎郵税六錢

蘆川忠雄君 山崎淸風君 共著
克己心の修養
◎大版上製 ◎金文字入 ◎正價壹圓 ◎郵税八錢

尾崎行雄君序 江口岳東君著
人格の光輝
◎大版全二册 ◎正價六拾錢 ◎郵税八錢

實業之日本記者 岳淵生著
品性の光輝
◎中版全一册 ◎正價參拾五錢 ◎郵税六錢

英國ジョンソン著 山崎梅處譯
向上的處世法
◎大版全一册 ◎正價五十錢 ◎郵税六錢

波多野烏峰君譯著
向上的青年
◎中版全一册 ◎正價參拾五錢 ◎郵税四錢

蘆川忠雄君著
意志の鍛錬
◎中版全一册 ◎正價卅五錢 ◎郵税四錢

蘆川忠雄君著
讀心術修養
◎中版全一册 ◎正價卅五錢 ◎郵税四錢

蘆川忠雄君著
觀察力修養
◎中版全一册 ◎正價卅五錢 ◎郵税四錢

實業之日本臨時增刊
人格の修養
◎正價廿貳錢 ◎郵税壹錢五厘

米國哲學博士ミラー氏著　波多野烏峯君譯
光榮ある生涯
◎中版頗美本　◎正價四拾錢　◎郵稅六錢

米國マーデン氏著　波多野烏峯君譯
快活なる精神
◎中版頗美本　◎正價卅錢　◎郵稅四錢

獨逸マイアー氏著　波多野烏峯君著
樂天の勝利
◎大版全一册　◎正價四拾錢　◎郵稅六錢

鈴木孔龍君著（青年必讀）
人生の光明
◎袖珍頗美本　◎正價卅錢　◎郵稅四錢

米國ラーチング氏著　堀內新泉君譯
不平慰安法
◎大版全一册　◎正價卅五錢　◎郵稅六錢

蘆川忠雄君譯
沈着心修養
◎中版全册　◎正價卅五錢　◎郵稅四錢

實業之日本記者　嬌溢生著
獨笑珍話
◎袖珍美本　◎正價四拾錢　◎郵稅六錢

實業之日本臨時增刊
樂天的處世法
◎正價四拾錢　◎郵稅六錢

英國フヰリス著　蘆川忠雄譯
雄健の氣象
◎正價四拾錢　◎郵稅六錢

英國ゼローム、ケイ、ゼローム著　波多野烏峯君譯
表裏百面　人生の眞相
◎正價四拾錢　◎郵稅六錢

新渡戸博士序　山方香峰著
新武士道
◎上製金文字入　◎正價壹圓　◎郵稅八錢

法學士　工藤重義著
經濟財政要義
◎大版上製　◎價壹圓廿錢　◎郵稅八錢

報知新聞記者　中村木公君編
名家長壽實歷談
◎上製クロース金文字入　◎定價八拾錢　◎郵稅八錢

堀內新泉君著
精力增進法
◎大版全一册　◎正價五拾錢　◎郵稅六錢

東京朝日新聞記者　杉村縱橫君編
肺病全快談
◎中版全一册　◎正價五拾錢　◎郵稅六錢

谷子爵題字　大石正巳君序　萬朝報記者　中島氣峥君著
禁酒禁煙の五年間
◎大版全一册　◎正價卅五錢　◎郵稅四錢

實業之日本臨時增刊
健康大觀
◎正價貳拾貳錢　◎郵稅壹錢五厘

米國理學士大木新三　鈴木精一　共著
新式　代數難問詳解
◎上製金文字入　◎正價七拾錢　◎郵稅八錢

農學博士　玉利喜造君著
冷水浴の實驗と學理
◎中版全一册　◎正價卅五錢　◎郵稅四錢

英國ノールソン博士著　海嶽生譯
思想健全法
◎中版全一册　◎正價參拾錢　◎郵稅四錢

細川潤二郎男題字　中村木公君編
名流實話　婦人のかゞみ
◎上製金文字入　◎正價七拾錢　◎郵稅八錢

樋口配天君著
默想
◎中版美本　◎正價卅五錢　◎郵稅四錢

木內菊次郎君著
折紙と圖畫
◎大版美本　◎正價卅五錢　◎郵稅六錢

中野觀象君編　畠山觀成君書
實用　商業文練習帖
（習字手本）◎大版一册木版　◎正價六拾錢　◎郵稅四錢

法學博士 和田垣謙三君序
高橋五郎君序 蘆川忠雄君著
人生の慰安
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅八錢

島田三郎君序 蘆川忠雄君著
常識の修養
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅八錢

男爵澁澤榮一君序 蘆川忠雄君著
實務才幹訓練
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅八錢

男爵前島密君序 蘆川忠雄君著
人生の奮闘
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅六錢

英國ウヰリヤムコベット氏著
法學博士高田早苗君序 蘆川忠雄君譯
青年處世法
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅八錢

伯爵大隈重信先生序 蘆川忠雄君著
樂天の生活
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅八錢

蘆川忠雄君著
應對談話法
◎中版全一冊 ◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

英國グランヴヰル博士著 海嶽生譯
簡易安眠法
◎中版全一冊 ◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

英國グランヴヰル博士著 海嶽生譯
神經健全法
◎中版全一冊 ◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

蘆川忠雄君著
心機轉換法
◎中版全一冊 ◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

蘆川忠雄君著
頭腦明快法
◎中版全一冊 ◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

英國グランヴヰル氏著 蘆川忠雄君譯
最新記憶法
◎中版全一冊 ◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

山方香峰君著(史筆超邁)
一國一人 **近世人傑傳**
◎上製金文字入 ◎正價八拾錢 ◎郵稅八錢

報知新聞記者 佐瀨醉楳君著
當代の傑物
◎上製金文字入 ◎正價六拾錢 ◎郵稅八錢

山方香峰君著(面目活躍)
世界 **人豪の片影**
◎中版美本 ◎正價五拾錢 ◎郵稅六錢

實業之日本記者 石井白露君著
最近米國 **成功十傑**
◎中版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅六錢

桑谷克堂君著(活教訓)
成功秘訣 **富豪の面影**
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅六錢

高田坪内有賀三宅田中舘諸博士追懷文
伯爵大隈重信君序 薄田斬雲君著
天下の記者
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅八錢

實業之日本社編纂
當代の實業家 **人物の解剖**
◎中版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵稅六錢

米國ルーズベルト著 山崎梅處譯
奮鬪的人格の典型 **クロムウエル**
◎正價 ◎郵稅

鈴木光次郎君著
現代百家 **名流奇談**
◎中版全一冊 ◎正價參拾錢 ◎郵稅四錢

實業之日本社編纂
日本 **富豪の家風**
◎全一冊美本 ◎正價五拾錢 ◎郵稅六錢

阿部長咲著
健全なる家庭
◎正價廿五錢 ◎郵稅四錢

報知新聞記者 天野誠齋君編
家庭日常の實驗
◎大版美本 ◎正價四拾錢 ◎郵稅六錢

米國エグルストン氏著 蘆川忠雄君譯
處世經濟法
◎中版全一冊 ◎正價參拾錢 ◎郵税四錢

實業之日本社編纂
處世座右訓
◎袖珍美本 ◎正價貳拾錢 ◎郵税二錢

實業之日本社編纂
向上發展 **處世要訣**
◎中版全一冊 ◎正價四拾錢 ◎郵税六錢

米國富豪自助的成功者グラハム翁書信、實業之日本社飜譯
成功者の信書 **處世教訓**
◎正價四拾錢 ◎特別上製金文字入五十五錢 ◎郵税八錢

實業之日本臨時增刊
處世の金科玉條
◎大版全一冊 ◎正價廿二錢 ◎郵税二錢

實業之日本社編纂
成功錦囊
◎中版全一冊 ◎正價參拾錢 ◎郵税六錢

英國リチー氏著 山崎梅處君著
富豪實驗教訓
◎大版全一冊 ◎正價六拾錢 ◎郵税八錢

波多野鳥峰君譯著
處世の標準
◎中版全一冊 ◎正價貳拾五錢 ◎郵税四錢

波多野鳥峰君譯著
成功の順路
◎中版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

英國ゼローム、ケイ、ゼローム氏著 日本波野鳥峰君譯
人生の半面
◎中版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

米國女學記者ペエン氏著 實業之日本社飜譯
女子處世訓
◎中版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

長谷川岩吉君述 上村玉絲君編
刺繡獨習書
◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

米國リチャードソン氏著 實業之日本社譯
最新讀書法
◎中版全一冊 ◎正價四拾錢 ◎郵税六錢

山方香峰君著(國語漢文研究法)
讀書便覽
◎三六版美本 ◎正價參拾錢 ◎郵税四錢

高橋五郎君著(苦心の名譽)
英語熟達法
◎中版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵税六錢

上海同文書院校友 谷原孝太君著
日清英會話
◎上製金文字入美本紙函入 ◎正價壹圓 ◎郵税八錢

米國文學博士 梅田又次郎君著
在米の苦學生及勞働者
◎中版全一冊 ◎正價卅錢 ◎郵税四錢

佐藤青衿君著
學生の前途
◎中版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税四錢

實業之日本記者 岳淵生著
新時代之青年
◎中版全一冊 ◎正價四拾錢 ◎郵税六錢

野田叱電君著
成功實例 **青年立身訓**
◎中版全一冊 ◎正價參拾錢 ◎郵税四錢

正岡藝陽君著
致富成業策
◎中版全一冊 ◎正價卅錢 ◎郵税四錢

實業之日本社編纂
增補 **成功座右銘**
◎袖珍頗美本 ◎正價拾錢 ◎郵税貳錢

實業之日本記者 藤原楚水君編著
作文自在 **美辭寶鑑**
◎上版金文字入 ◎袖珍美本 ◎正價七拾錢 ◎郵税八錢

金澤商業學校々長 永野耕造君著
商業修身訓
◎上中下三冊 ◎大版繪入 ◎正價四拾五錢 一冊拾五錢宛 ◎郵税八錢(一冊四錢)

村井弦齋君著
訂正増補 **婦人の日常生活法**
◎全一册美本◎正價上製壹圓廿錢並製壹圓◎郵稅上製拾貳錢並製八錢

石塚月亭君編
弦齋夫人の料理談
◎全一册頗美本◎正價六十錢◎郵稅八錢

醫學博士加藤照麿先生校閲 西谷龍顯君譯著
最新育兒法
◎全一册美本◎正價七拾錢◎郵稅六錢

西谷龍顯君編著
婦人の重寶
◎大版全一册◎正價五拾錢◎郵稅六錢

堀內新泉君著
娘に與へたる **母の書簡**
◎大版全一册◎正價四拾錢◎郵稅六錢

西谷龍顯君著
太郎の質問に **母の答**
◎中版全一册◎正價廿錢◎郵稅四錢

山方香峰君著
日常生活 **衣食住**
◎上製金文字入◎正價壹圓廿錢◎郵稅拾貳錢

梅田矯菓君著
家庭菓子製法
◎全一册美本◎正價五拾錢◎郵稅六錢

本間鶴治君著
通俗 **家庭理科**
◎大版全一册◎正價七拾錢◎郵稅八錢

赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子君 共著
日本料理法
◎大版全一册◎正價七拾錢◎郵稅八錢

村井弦齋校閲 婦人世界編輯局編纂
化粧かゞみ
◎正價拾五錢◎郵稅壹錢五厘

村井弦齋校閲 婦人世界編輯局編纂
衣裳かゞみ
◎正價拾五錢◎郵稅壹錢五厘

實業之日本記者 都倉義一君著
最新式記帳法
◎大版全一册◎正價七拾錢◎郵稅八錢

神戸高等商業學校 東敎授校閲 竹內正太郎君著
商業簿記獨修書
◎大版全一册◎正價七拾錢◎郵稅八錢

竹內正太郎 付瀨玄兩君共著
最新商業簿記
◎大版全一册◎正價卅錢◎萬稅六錢

金澤商業學校敎頭 中野觀象君著
横帳改頁 **單式簿記**
◎大版全一册◎正價卅五錢◎郵稅四錢

日本石油會社會計課長 竹田常治君著
實用家計簿記
◎大版全一册◎正價四拾錢◎郵稅六錢

與石丑太郎君著
利廻早見表
◎大版全一册◎正價卅五錢◎郵稅四錢

土屋長吉君著
商戰必勝
◎中版全一册◎正價卅五錢◎郵稅六錢

土屋長吉君著
店前裝飾術
◎中版全一册◎正價四拾錢◎郵稅四錢

土屋長吉君著
商品と商業經營
◎中版全一册◎正價卅五錢◎郵稅六錢

土屋長吉君著
商業智囊
◎中版全一册◎正價卅五錢◎郵稅四錢

土屋長吉君著
和洋折衷 **最新式簿記**
◎中版全一册◎正價卅五錢◎郵稅六錢

土屋長吉君著
最新販賣術
◎中版全一册◎正價卅五錢◎郵稅六錢

土屋長吉君著
商工執務法
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵税六錢

宮田千年君著
世界商業史綱
◎上製金文字入 ◎正價六拾錢 ◎郵税八錢

金澤商業學校教頭 中野觀象君著
最新 外國商業地理
◎上製金文字入 ◎正價五拾五錢 ◎郵税八錢

商品學專攻 渡邊久太郎君著
最新 商品教科書
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵税八務

土屋長吉君著
簡易商業學
◎上下二冊 ◎正價五拾五錢 ◎郵税八錢 一冊四錢

土屋長吉君著
商家繁榮策
◎中版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵税六錢

土屋長吉君著（訂正改版）
最新商業要綱
正價 上製八拾五錢 並製七拾錢 郵税 並上製共八錢

五十嵐次郎君著
最新商業算術
◎上製金文字入 ◎正價八拾錢 ◎郵税八錢

渡邊德兵衞君 小里運八君 共著
實用珠算教科書
◎大版全一冊 ◎正價五拾錢 ◎郵税八錢

高間昭君 上田多仲君 中宮佐久太郎君 共著
最新珠算教科書
◎大版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

男爵後藤新平君 中橋德五郎君序 西村正雄君著
最新事務法
◎上製金文字入 ◎正價六拾錢 ◎郵税六錢

商業學士 小林行昌君 下平精一君 共著
英國商業實務
◎上製金文字入 ◎正價壹圓卅錢 ◎郵税拾貳錢

米國法學博士 獨逸哲學博士 ゼレミヤホキップルゼンクス氏著 農商務省書記官 別府丑太郎君著
産業合同論
◎上製金文字入 ◎正價八拾錢 ◎郵税八錢

累代菓子製造家 梅田矯菓新著
和洋折衷 新案菓子製法
◎大版美本 ◎正價六拾錢 ◎郵税六錢

商業學士 小林行昌 土屋長吉共著
中等經濟學
◎大版全一冊 ◎正價四拾錢 ◎郵税六錢

法學博士 天野爲之君校閱 土屋長吉君著
應用經濟學
◎大版全一冊 ◎正價四拾錢 ◎郵税六錢

栗原亮一君序 淺井茂侃君著
最新 農業經營
◎大版全一冊 ◎正價四拾五錢 ◎郵税六錢

信州養蠶家 宮入良右衞門君著
經濟的育蠶法
◎大版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税四錢

在上海 長谷川宇太治君著
渡清案内
◎中版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

加藤政之助君著
韓國經營
◎大版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

加藤政之助君著
滿洲處分
◎大版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯
實業の鍵
◎大版全一冊 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

米國富豪カーネギー翁著 男爵澁澤榮一郎君序 小池靖一君譯
實業の帝國
◎附錄カ翁評傳 ◎正價卅五錢 ◎郵税六錢

米國自成的成功者 カーネギー翁著 男爵岩崎彌之助君序 伊藤重次郎君譯
富の福音
◎正價四拾錢 上製金文字入五拾五錢 ◎郵税八錢

實用作文法　文學士　久保天随君著
◎上製金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

書信文作法　文學士　久保天随君著
◎上製金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

敍事文作法　文學士　久保天随君著
◎上製金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

論文作法　文學士　久保天随君著
◎上製金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

儀式文作法　文學士　久保天随君著
◎上製金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

美文作法　文學士　久保天随君著
◎上製金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

文章大成　鵜飼天淵君編纂
◎上製金文字入　◎正價壹圓　◎郵税八錢

書信文大成　鵜飼天淵君編纂
◎上製金文字入　◎正價八拾錢　◎郵税八錢

婦人消息文　三輪田眞佐子序　鵜飼天淵君著
◎大版全一册　◎正價五拾錢　◎郵税八錢

實用 **商業書信文範**　金澤商業學校敎頭　中野觀象君著
◎大版全一册　◎正價四拾錢　◎郵税八錢

英和商用文教科書　商業學士　小林行昌君著
◎上版金文字入　◎正價四拾五錢　◎郵税六錢

最新 **商業書簡と書式**　早稲田政學士　瀧清君著
◎中版全一册　◎正價廿五錢　◎郵税四錢

立身と繁昌　西岡英夫君著
◎全一册　◎正價廿五錢　◎郵税四錢

地理と商品　東京日々新聞記者　市吉徹夫君著
◎中版全一册　◎正價廿五錢　◎郵税四錢

商人と文章　西岡英夫君著
◎中版全一册　◎正價廿五錢　◎郵税四錢

銀行と會社　東京日々新聞記者　市吉徹夫君著
◎中版全一册　◎正價廿五錢　◎郵税四錢

商賈と勘定　西岡英夫君著
◎中版全一册　◎正價四拾錢　◎郵税六錢

日常の言語　蘆川忠雄君著
◎中版全一册　◎正價廿五錢　◎郵税四錢

新案 **商業書信活法**　金澤商業學校敎頭中野觀象君　高間昭君共著
◎大版全一册　◎正價五拾錢　◎郵税八錢

實業大家實驗敎訓 **獨立自營**　江口岳東君著
◎中版全一册　◎正價四拾錢　◎郵税六錢

戰捷國民 **實業指針**　男爵前島密君著序　澤村菊池兩君共著
◎大版全一册　◎正價五拾錢　◎郵税八錢

刺繡獨習書　實践女學校講師長谷川岩吉君述
◎正價廿五錢　◎郵税四錢

東亞の寶庫 **滿洲案內**　土方伯題字　大隈伯序　今井忠雄君著
◎中版全一册　◎正價廿五錢　◎郵税六錢

家庭應急手當法　醫學得業士　武藤喜作君著
◎正價四拾錢　◎郵税四錢

日本一の

下の問題に苦む人ありや

實業雜誌

實業之日本

本誌は左の問題を悉く解決す

▲如何なる實業の方法が成功するか
▲如何なる人格の人が成功するか
▲如何なる體格の人が成功するか
▲如何なる商業の實務が成功するか
▲如何なる心得の主人が成功するか
▲如何なる心得の店員が成功するか
▲如何なる種類の職業が成功するか
▲如何なる海外發展者が成功するか
▲如何なる處世法が成功するか
▲如何なる新奇の工夫が成功するか

▲如何にして獨立自營すべきか
▲如何にして失敗を避くべきか
▲如何にして逆境に處すべきか
▲如何にして健康を增進すべきか
▲如何にして職業を獲べきか
▲如何にして品性を修養すべきか
▲如何にして顧客を吸集すべきか
▲如何にして海外に渡航すべきか
▲如何にして記憶を健全にするか
▲如何にして人生の慰安を得るか

右の問題を確的に解決する者は唯本誌あるのみ

一冊 價拾壹錢 郵税壹錢
◎月二回一日十五日發行
◎十二冊前金郵税共壹圓
卅五錢廿四冊貳圓六拾錢
一ヶ年定期增刊共參圓也

日本一の

此外に婦人問題ありや

婦人雜誌

婦人世界

本誌は左の婦人問題を悉く解決す

▲如何にせば幸福の婦人となるか
▲女子の修養は何が大切なるか
▲幸福なる結婚は如何にすべきか
▲如何にせば良人に愛せらるゝか
▲如何にして家庭を樂しくするか
▲小兒は如何に裸育すべきか
▲男兒は如何に養育すべきか
▲女子は如何に養育すべきか
▲男兒は如何に娶らしむべきか
▲女子は如何に嫁がしむべきか

▲美貌は如何にして保つべきか
▲健康は如何にして保つべきか
▲婦人病は如何に治療すべきか
▲家政は如何に整理すべきか
▲衣服は如何に着用すべきか
▲食物は如何に料理すべきか
▲召使は如何に使用すべきか
▲社交は如何なる方法にすべきか
▲文藝の趣味は如何にして養うか
▲如何なる職業が女子に適するか

右の問題を懇切に解決する者は唯本誌あるのみ

一冊 價拾五錢 郵税五厘
◎毎月一回一日發行
◎六冊前金郵税共九
拾錢十二冊壹圓七拾
五錢郵劵代用一割增

日本一の

父兄は見落す勿れ

少年雜誌

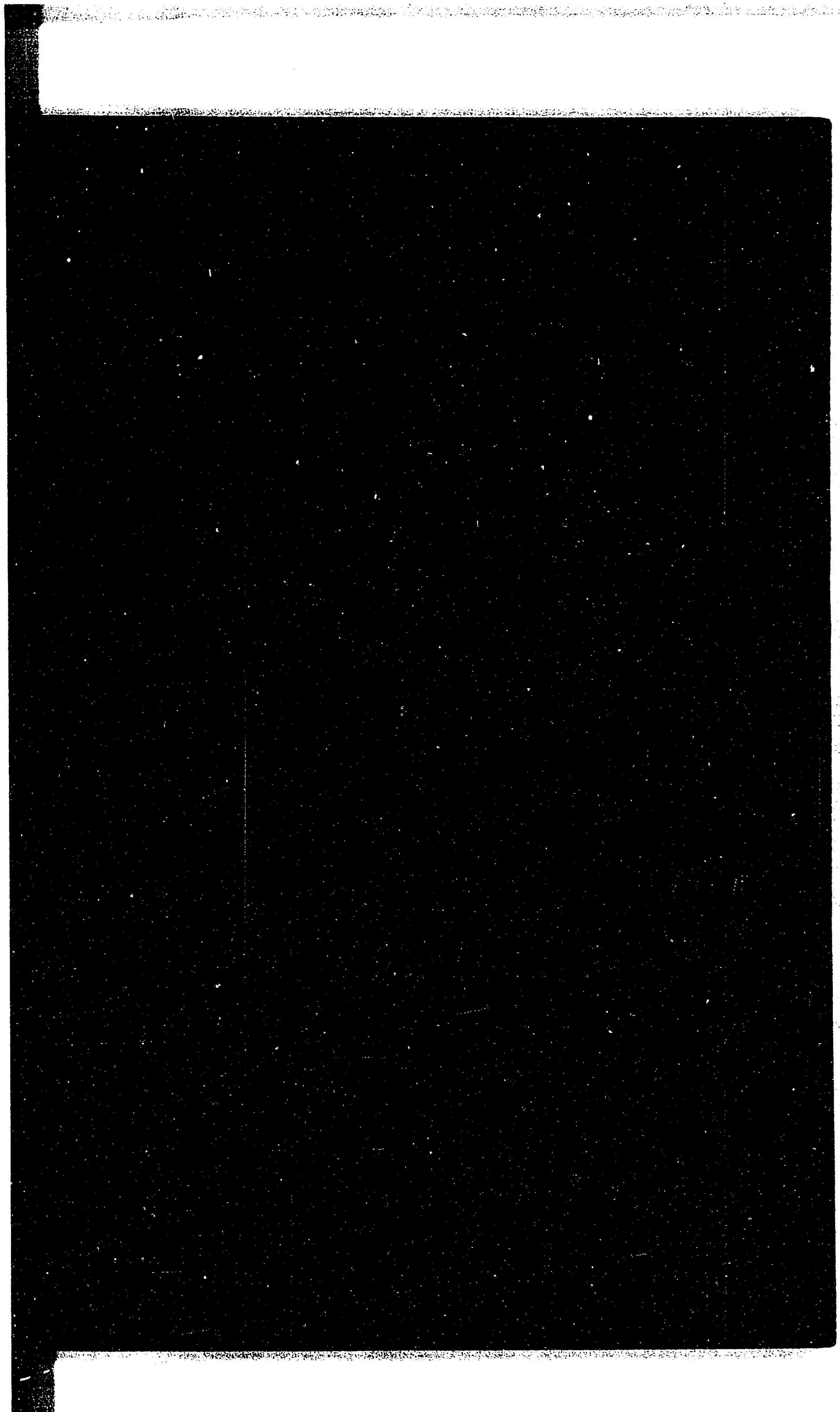
日本少年

一冊定價拾錢 郵稅壹錢
○毎月一回一日發行
○六冊前金郵稅共六拾錢十二冊壹圓拾六錢△郵劵代用一割增

左の如き少年教育に注意する少年雜誌ありや

▲小學校の敎授法と密接の聯絡ある者は少年雜誌中唯本誌あるのみ
▲文部省の假名遣ひに依る者は少年雜誌中本誌最も嚴正なり
▲故に學校の敎育を補佐する者は少年雜誌中本誌に如くものなし
▲少年の視力を勞すること最も少なき者は本誌を以て第一となす
▲少年の頭腦を勞すること最も少なき者は本誌を以て第一となす
▲少年に娛樂を與へ同時に智識を與ふる様編輯に苦心せるは本誌也
▲少年の最も喜ぶ懸賞物考へ物の一番多き者は本誌なり
▲小學校職員諸氏の間に最も評判よき者は此『日本少年』なり
▲常に本誌を愛讀する少年は必ず健全なる發達を遂ぐるや疑なし
▲故に家庭敎師の代理を爲す者は少年雜誌中本誌に如くものなし

最も健全なる少年雜誌は本誌也



17
321

202961−000−9

17−321

社会側面観

波多野　烏峰／著

M41

EDH−0020